4．仏生寺城と竹内館 —細川氏の本拠地をめぐって—

高岡　　徹

1　細川氏による仏生寺城の築城とその背景

南北朝期の越中において強固な勢力を有した桃井直常は、応安3年（1370）の婦負郡長沢や翌4年の砺波郡五位荘での戦いにおいて守護斯波義将の軍勢によって大敗を喫し、没落を遂げた。斯波義将は応安元年（1368）から康暦元年（1379）頃まで越中守護職を務め、その後を畠山基国が引き継いだ。しかし、斯波氏はこれ以前にも貞治年間（1362～68）に父高経が守護職を務めたことがあり、軍事討伐とそうした守護在職期間を通して越中国内各所に得分権を有するようになったとみられる。院政期以来、閑院流藤原氏の三条家の荘園となっていた新川郡西部の高野荘の内にも、こうした騒乱過程で進出した斯波方武将が荘務代官職などの得分権を得ていたと考えられる。

中世の高野荘は、おおよそ近世の高野郷とその北に連なる市田郷を含んだ広い地域で、西は常願寺川から東は白岩川と支流の栃津川付近にかけての範囲にあたるとみられる。この高野荘の中心地となったのが仏生寺であり、伝承によれば、細川氏が城郭を築き、居城したという。城主名としては、細川曽(宗・惣)十郎が伝わるが、この細川氏について『越中志徴』の「細川氏伝」には、「斯波武衛義廉に六家老あり。鹿草出羽・二宮某・織田大和守・朝倉弾正・甲斐左近・細川某也。此内越中へは鹿草・二宮・細川下るとあり。然れば此細川は其の族ならんか。」とある。すなわち、斯波氏の家老である細川氏が高野荘の仏生寺城に居城していたと推測されているのである。

ところで、斯波氏家老の細川氏とは、いかなる系譜の人物なのか。結論から言えば、前記六家老の内、鹿草氏と細川氏は実は同一人物とみられる。鹿草氏と越中との関わりは古く、『太平記』巻第三十八には、康安2年（1362）、桃井直常が越中へ進攻した際のこととして、「越中ニハ、桃井播磨守直常信濃国ヨリ打越テ、旧好ノ兵共ヲ相語フニ、当国ノ守護尾張大夫入道ノ代官鹿草出羽守ガ、国ノ成敗ミダリナルニ依テ、国人挙テ是ヲ背ケルニヤ、野尻・井口・長倉・三沢ノ者共、直常ニ馳付ケル程ニ、其勢千余騎ニ成ニケリ」と記し、南北朝期に越中の守護斯波高経の代官として鹿草出羽守の名が見えている。

続く応永19年（1412）の東寺造営料賦課史料（『入善町史』資料編2）によれば、斯波氏の被官として「高野七郷」を支配する細川兵部大輔入道の名が見える。久保尚文氏によると、この兵部大輔入道は細川一族でありながら斯波氏の被官化し、細川鹿草（シシクサ）の二重姓を名乗り越中支配に関わった人物であるという［久保　1990］。その所領高野七郷については、文明年間（1469～87）の細川政元安堵状（「大館記」書札案）に、跡職高野本郷を弥三郎に相続させたことが見えている。このことから、仏生寺城の城主として伝承される細川氏とは、実は斯波氏の被官で、高野荘の代官支配にあたっていた細川（鹿草）兵部大輔入道及び同弥三郎の系統（以下、「高野細川氏」と呼ぶ）を指すものとみて、間違いあるまい。同細川氏による仏生寺城の築城時期については、今のところ明確な史料がないため不明だが、前記応永19年（1412）の東寺造営料賦課史料から、遅くとも15世紀初めには原型となる城館が築かれていたと考えたい。その目的は、言うまでもなく、高野荘域を支配するための拠点構築であろう。

高野細川氏が兵部大輔入道以来、高野荘で在地領主化を遂げ、勢力を有するに至ったことは、文明17年（1485）9月2日の室町幕府奉行人連署奉書案（『富山県史』史料編Ⅱ中世　963号）に「一、安禅寺殿御領越中国市田郷事、高野細河強入部云々、言語道断之次第也、不日退彼妨、可被全寺家直務、若猶令難渋者、一段可有御成敗之由、被仰出候也、仍執達如件」として、新川郡守護代椎名氏に対し、高野細川氏による市田郷押領の禁止が命じられていることからも裏付けられる。なお、伝承によれば、仏生寺城主細川曽十郎は、「越中五大将」の一人だったともいう（『越登賀三州志』）。

2　仏生寺城の立地と舟運

仏生寺城は新川郡の西部を流れる白岩川の中流部に位置するが、大正７年発行の２万５千分の１地形図などから、同川がかつては大きく蛇行し、城跡のすぐ北側まで近接していたことが知られる。注目されるのは、その旧川岸に「舟付場」の地名が残ることである。この白岩川は新川郡の中でも舟運に適した河川であり、古くより舟を使った物資の輸送に利用されていたと考えられる。おそらく、仏生寺は中世において高野荘内の流通の中心地となる役割を果たしていたに違いない。仏生寺から上流にさかのぼれば、井見荘の支配拠点であった土肥氏の弓庄城がやはり川沿いに立地しており、当地域の拠点的な中世城館が河川と密接な関わりを持つ形で築かれていることが理解される。無論、白岩川は人の往来にも利用されたはずであり、当地域における交通の動脈として極めて大きな役割を果たしていたとみられる。仏生寺城がその白岩川に近接して立地するのは、城主細川氏にその舟運を利用・統制する意図があったことを示すものである。

また、『越中志徴』は江戸時代の舟橋村の村名の由来について「郷村名義抄に、此所往古細川宗十郎城下にて城江舟橋を懸けたり。其の橋爪に村立申に付、舟橋村と申由申伝候。」と記し、城のそばに川を渡るための舟橋が設けられていたとの伝承を伝える。この伝承がどこまで事実を反映しているかは不明だが、仏生寺城付近が水陸交通の要衝であったことはうかがえる。参考までに、白岩川沿いに立地する中世の城館について見るなら、河口で、北陸街道の渡し場でもある水橋に水橋館（館主水橋氏）、支流の小出川･栃津川沿いにそれぞれ小出城や高原城（前記土肥氏の弓庄城の出城）などが存在した。この他、西の砺波地方においては、遊佐氏の居城した蓮沼城付近が北陸街道と小矢部川舟運の結節点として、交通上大きな役割を果たしたことが知られている。こうした城館が河川の渡し場や舟運を統制し、地域経済の中で流通を押さえる機能を果たしていたことを見逃すことはできない。言わば、城館が地域経済の死命を制していたと言っても過言ではない。なお、城館と河川の密接な関係については、[高岡　1981] の中ですでに指摘した。

3　竹内館とその性格

ところで、高野細川氏に関わる城館がもう一か所存在する。それは仏生寺城の北西500ｍの八幡川東岸に位置する竹内館である。江戸時代の書上類によると、その館は細川曽十郎の「本丸」あるいは「付城」とも呼ばれ、当時は無量寺（現浄土真宗）が建っていた。筆者の聞き取りによれば、その場所は八幡川東岸の「寺屋敷」だという。無量寺の寺伝によれば、十三世玄海（慶長14年＝1609年没）の時、同地に移ったが、嘉永６年（1853）に火災、安政５年（1858）に洪水の被害を受けたため、二十六世慈興（文久２年＝1862年没）の時に現在地（地鉄舟橋駅そば）に移ったという。

今、圃場整備前の古い地籍図を広げてみると、「寺屋敷」の付近には「伊勢屋敷」、「市兵屋敷」、「上市兵屋敷」、「小次郎屋敷」などの「屋敷」地名が多く分布することに気づく。これは竹内館を中心に、城主細川氏の家臣団屋敷などが存在したことを示すものであろうか。この一帯は北から東を白岩川、西を八幡川に囲まれた南北に細長い微高地であり、中世に在地の領主が拠点を営むには適していたとみられる。問題の館跡は、「寺屋敷」に隣接する「中城畠」のあたりと推測される。この西側には「西城畠」、東側には「城之越」、「西城之越」といった城館関連地名が分布する。これらの地名の存在については、すでに昭和54年に筆者がその存在を報告しているところである［高岡　1979］。

参考までに竹内館について記した江戸時代の書上類を掲げる。

（ａ）一、竹内館跡　　竹内村領、東西三拾間程、南北三拾間程、南ニ堀幅弐間斗、西ニ小川御座候、当時浄土真宗無量寺居屋敷ニ相成居申候、細川曽十郎殿本丸之由申伝候

（文政元年城跡館跡由来申伝之趣書上申帳）

（ｂ）一、竹内村館　　仏生寺村付城　平場、堀一重幅弐間斗、四方三拾間斗

（越中古城館趾記）

（c）一、竹田(内カ)村古館跡　　平地、本丸三拾間程、堀幅弐間、細川曽十郎居住

（越中古城記）

これらによれば、竹内館は郭が一つだけの単郭で、その規模も30間（約54.6m）四方と比較的小規模で、まわりに幅2間（約3.6m）の堀があったことになる。また、（a）が西に小川があると記すのは、八幡川のことであろう。ところで、（a）や（c）が当館跡を「本丸」と記すのは、なぜであろうか。一般に「本丸」は城などの中心となる郭を指すが、そのことからすれば、細川曽十郎のいた中心拠点ぐらいの意味であろうか。むしろ、ここでは（b）に記すように仏生寺城の「付城」と伝えている点に注目したい。この場合、「付城」は出城（支城）の意に用いられており、竹内館は仏生寺城を本城とする出城に位置づけられよう。このように、高野細川氏はその最盛期において仏生寺に本城を構え、北の竹内に出城を配置する形で高野荘支配のための本拠地を形成していたのである。

4　文献史料から見た仏生寺城の構造と規模

さて、高野細川氏が本城とした仏生寺城とは、どのようなものであったのか。やはり江戸時代の書上類から記載の内容を拾い出してみよう。

（d）一、仏生寺古城　　仏生寺村領、東西六拾間程、南北九拾間程、堀幅五間程西ゟ南ニ御座候、細川曽十郎殿又ハ備中守殿与申由ニ而御居城之処、佐々内蔵助殿之時分落城之由申伝候、年号之儀相知不申候、右場所当時宮地ニ相成居申候、且又曽十郎殿墓所之由ニ而石塔弐本御座候、田畔ニ相成居申候

（文政元年城跡館跡由来申伝之趣書上申帳）

（e）一、仏生寺村古城高野屋　　細川惣十郎

南北九拾間、東西六拾間、北ノ方高サ五間、南ニ小川有、西ノ方堀幅弐間（後略）

一、高野庄仏生寺之城ハ、椎名カ旗下細川惣十郎代々持来ル、小出村館高原村ノ館両城モ惣十郎元祖細川備前守代迄細川一族持来ル、其後高山(原カ)ノ館寺田郷ニアル白濱與助、加代治兵衛両人ハ土肥ヨリ為在番指置所ニ、成政弓ノ館ニ出陣之砌、右両人城ヲ明落行ノ由、仏生寺ノ城其時分成政押寄力戦ニ及ヒ、惣十郎ヲ生捕テ城中ニテ終ニ切腹ス

（越州新川郡郷庄古城）

（f）三江(郷カ)ノ仏生寺村城跡の事

此城跡ハ長尾謙信越中の国乱入の時、越中五大将の壱人細川曽十郎(実ハ中守宗也)城跡也、平地にして本丸の形東西六十間斗、南北九十間斗、堀有て幅五間斗、南に川流るゝ也、富山ゟ道弐里を隔つ、此細川ハ高野の郷を領せし人也（後略）

（越中古跡粗記）

これらによれば、仏生寺城は竹内館と同様、平地に築かれ、東西60間（約109.2m）、南北90間（約163.8m）の規模で、まわりに幅5間（約9.1m）の堀（ただし、eの史料では、西側の堀幅を2間＝約3.6mとする）があったことがわかる。平地の郭の規模としては大きなものである。さらに（e）によれば、城の北側は高さ5間（約9.1m）だったとあり、北から見ると一段高くそびえた丘状の地形になっていたことが知られる。このことは、大正7年発行の地形図にその微高地が描かれていること、また昭和3年刊の『舟橋村誌』にも当城跡が「舘山城跡」として、小高い丘状の景観を呈する写真を掲載していることからも裏付けられる。

なお、『越登賀三州志』は別に「佐脇純安永三年此の城跡を見るに、無量寺辺より東南に本城の跡あり。北東に土居

あり。若狭川（又白石川と云ふ。）を帯び、堅固の地也。此の外所々土居塹跡残れども不分明。鋤きて田畑となると云ふ。」として、安永３年（1774）の佐脇氏による現地の踏査報告を紹介している。文中、仏生寺城の位置を説明する際、「無量寺辺より東南に本城の跡あり」と記すのは、まさに出城であった竹内館跡付近の無量寺から本城の仏生寺城跡方向を望んだものとして正確である。報告はまた、城の北側に土居（土塁）が残っていること、他にも、あちこちに土塁や堀跡が残るが、はっきりしないと記す。そして城跡は耕され、田畑になっているとも伝えている。ここに記す北側の明確な土塁跡は、前掲（ｅ）が「北ノ方高サ五間」と記した箇所を指すものであろう。無論、土塁は郭の全周を巡っていたものとみなければならないが、安永３年当時は大半が耕され、北側以外は部分的にしか残っていなかったことがわかる。

5　地籍図による仏生寺城のプラン復原

文献史料から知られる城跡の規模や構造は以上のとおりだが、実際の城のプランを知る手がかりとして、圃場整備前の古い地籍図がある。この地籍図による仏生寺城のプランの復原は、すでに筆者が昭和55年に試みているが［高岡　1980］、今回改めてその内容を紹介するものである。まず、地籍図（地目は明治時代のもの）よれば、城跡は小字「舘中（タチナカ）」を中心とした一帯である。その中には畑の地目が帯状に周囲を取り巻く一画がある。おそらく、帯状の畑は郭の周囲に築かれた土塁の痕跡であり、郭のアウトラインを示すものであろう。郭の全体の規模は、江戸時代の書上類に記された東西60間、南北90間の数値にほぼ一致する。その周囲に見られる小字「東川」や「南川」などの帯状の水田が、郭の外側に設けられた堀の跡であることは、言うまでもない。

これを主郭とするなら、その南側に小字「大願寺」と称する一群の畑が見出される。この「大願寺」は、現在細川の東岸に移っている浄土宗大願寺の旧跡である。寺伝によれば、仏生寺城主細川曽十郎が千手観音を祈願し、城の西南に大寺院を設け、これを「大願寺」と称したのがその始まりだという。昭和３年刊の『舟橋村誌』によると、当時は寺跡の中に「鐘撞堂」の跡と伝える小高い丘があったという。城主の祈願寺が置かれたとはいえ、地籍図に描かれた形態から見て、主郭の南側を守る役割を果たした副郭の跡であろう。

以上、地籍図からの検討を通して、仏生寺城が白岩川の支流、細川西岸の微高地に築かれた平城であり、南北二つの郭からなる複郭式の城郭で、中心となる主郭は北側の小字「舘中」、また副郭は南側の小字「大願寺」にあたることが判明する。郭の周囲には土塁が築かれ、その外側には堀を掘り、細川から引かれた水がめぐっていたと思われる。この内、東側の堀については、細川の旧河道をそのまま利用したものであったと考えられる。こうした立地やプランは、現婦中町の安田城（国指定史跡）に酷似するものとして注目される。安田城の場合は築城の時期が戦国末期の16世紀後半であり、時期が一世紀以上下り、郭の数も異なるものの、河川のそばの微高地に築城し、北側に主郭、南側に副郭を配した基本的なプランは驚くほど似ている（高岡　徹「安田城復原図」『日本城郭大系』第７巻、1980年）。このことから、15世紀の仏生寺城→16世紀後半の安田城に至る、河川沿いに立地した城郭の基本的なプランを読み取ることもできよう。

なお、主郭の北側には、堀をはさみ「古町」と称する小字があった。その北にはさらに「舟着場」があることから、このあたりに城下集落があり、水運による物資の集散地としてもにぎわっていたと推測される。

6　発掘調査結果から見た仏生寺城のプラン

ここまでは、昭和55年以前に筆者が行った文献史料や地籍図にもとづく仏生寺城のプラン復原の試みを紹介した。では、過去の発掘による調査結果はどのようなものであったか。この点についてはすでに本書の中でも述べられているように、平成７年度調査で主郭北東部の堀跡、同８年度調査で副郭南東部の堀跡にあたる落ち込み、また同10年度

の調査で主郭西側の堀の外側のラインなどが検出された。この内、平成７年度の調査で検出された堀の規模は幅14mであることが確認されている。この数値は文献史料に記された幅５間（約9.1m）をかなり上回る規模と言える。とはいえ、ここまでの成果は、一応、地籍図による復原プランをほぼ裏付けるものとみなせよう。ところが、平成12年度調査で新しい事実が判明した。それは主郭内部での「内堀」とも言うべき堀の発見である。

この堀は東西の土塁の内側で発見され、規模は東側で幅７m、深さ２mを測る。これに対し、西側は２回掘られており、古い堀は幅３m、深さ1.5m、それを埋めて掘られた新しい堀は幅４m、深さ２mである。このことから、少なくとも１回は城内で大規模な改修が行われたと推測される。それはともかく、この発見によって、主郭の内部にもう一つの堀を巡らした内郭が存在したことが明らかになった。こうした二重堀の存在は、城が極度の軍事的緊張下に構築されたことを物語る。

なお、主郭の東西の長さについては、約120mであることも判明した。これは前掲の書上類に記す長さを多少上回るものの、土塁が後世の削平によって失われ、外堀の落ち際を測点としたことによる差異であろう。

内堀の存在以外にも知られたことは多い。たとえば、内堀の内部で確認された柱穴は直径60㎝、深さ120㎝と、当時の集落のほぼ倍の規模を持ち、かなり大きな建築物が建っていたことが推測されている。出土した遺物は中世土師器が最も多く、その他、珠洲・瀬戸美濃・輸入陶磁器、フイゴの羽口や鉄製品・石製品（五輪塔・碁石・砥石・硯）、漆器椀や古銭など多岐にわたり、仏生寺城が単なる軍事施設ではなく、日常的な生活の場としても使われていたことが明らかとなった。この内、フイゴの羽口は城内で鉄製品が製造されていたことを示すものである。おそらく、城主細川氏はこの主郭内で暮らし、碁を打ちながら日を過ごすこともあったであろう。これらの出土遺物などから、城の在立期間は15世紀前半から16世紀初めの約100年間にわたると考えられている（『舟橋村仏生寺城跡現地説明会資料』）。

7　高野細川氏と仏生寺城の終焉

さて、高野細川氏はその後、どのような運命をたどったのであろうか。この点については、久保尚文氏も述べられているように、斯波氏の衰退過程で将軍足利氏の直轄軍とも言うべき幕府奉公衆に転身したことが知られる。それは『文安年中御番帳』に、「外様衆」として「細川完草（シシクサ）」の名が見えることから確認される。同番帳の作成は1440年代である。一方、三条家の高野荘支配が衰退していく過程で、その代官支配に政所所司伊勢氏、将軍夫人日野富子や日野政光が関わるなど、高野荘の一部が応仁の乱発生以前より将軍家御料所となっている（「結番日記」文明９年４月２日条）。すなわち、高野細川氏は奉公衆となり、その給人となっていた可能性がある。また同時に、細川政元を惣領とする管領細川一族との結びつきを持つなど、当初は高野荘にあって比較的独自の立場を取ることができたとみられる。

高野細川氏が斯波氏との関係を断ち、本来の一族である管領細川氏との関係を深めていったことは、文明年間に細川政元が鹿草弥三郎に同兵部大輔入道の跡職高野本郷を相続させていることから裏付けられる（第１節参照）。しかし、明応２年（1493）の政変により廃された10代将軍足利義材が越中に下向し、幕府が分裂・抗争する戦国期を迎えると、義材方幕府の中心となった越中では、守護代を務める神保氏や椎名氏の国人支配権が強大化していった。たとえば、明応年間（1492～1501）の椎名氏被官小間胤守の過所によれば、水橋・岩瀬の渡し場を管掌する奉行所が椎名氏の支配下にあり、その支配領域の西限を画していたことが明らかとなる。こうした情勢の中で、高野細川氏も新川郡守護代椎名氏に属したのであろう。このことを裏付けるかのように、前掲（ｅ）史料は、仏生寺城について「椎名カ旗下細川惣十郎代々持来ル」（傍点、筆者）と記し、城主高野細川氏が椎名氏の旗下であったとする伝承をあげている。（ｅ）史料はまた、小出（現富山市）・高原（現立山町）の両城が「惣十郎元祖細川備前守代迄細川一族持来ル」と記し、細川氏の拠点がさらに北と南に配置されていたと伝える。伝承とは言え、確かに両城は高野荘の荘域外縁部に位置しながら、白岩川の水系で仏生寺城とも結ばれており、無視はできない。このことは、高野細川氏が最盛期にそこ

までの範囲を勢力下に置いていたことを物語るのであろう。

さて、永正17年（1520）に入ると、越後守護代の長尾為景が越中守護畠山ト山（尚順）の要請により神保慶宗討伐のため、越中へ進攻する。同年12月21日、神保慶宗は遊佐・椎名・土肥氏らと共に新庄（現富山市）に拠る長尾為景を攻め、激戦ののち敗死を遂げるに至った（上杉家文書『富山県史』史料編Ⅱ中世　1302号）。おそらく細川氏はこの時、椎名氏と共に長尾勢を攻める神保方に属していたとみられる。その結果、本拠地である仏生寺城も敵対拠点とみなされ、攻撃を受けたはずである。今回の発掘調査において炭や焼土が多量に検出されたことは、城内が火災で焼失したことを示している。この火災は前記の長尾勢による攻撃の結果とみてよいであろう。まもなく内堀が埋められているのは、これによって城がその役目を終え、廃城になったことを物語るものである。発掘調査による城の存立期間もこの頃に終わっている。

なお、仏生寺城主としての細川曽十郎は、前掲（e）史料の伝承によれば、戦国末期に佐々成政が弓庄城の土肥氏を攻めた際、共に成政の攻撃を受け、捕らえられて城中で切腹したと伝えている。その折、高原城には白濱與助、加代治兵衛両人が土肥氏より在番として指し置かれていたが、佐々成政の弓庄出陣の時、城を捨てて落ちのびたという。伝承どおりとすれば、佐々成政の弓庄攻めは天正10（1582）～11年のことであり、仏生寺城と細川曽十郎もその頃まで存続していたことになるが、今のところ、前節で紹介した発掘の成果からはこの伝承を裏付けることはできないようである。それはともかく、以上の伝承から、隣接の土肥氏とは本拠地が共に白岩川の水運で結ばれていたことから、日常的に深い関係で結ばれていた様子がうかがえる。

仏生寺城の落城後、永禄12年（1569）には上杉謙信が松倉城の椎名氏を駆逐し、新川郡一帯を制圧する。同年11月、越中在番上杉部将の統括者である河田長親が某に高野本郷舟橋村の知行を安堵しているのは、そのことを如実に物語るものであろう（井上昇三所蔵文書『新潟県史』資料編５、3848号）。

末尾ながら本稿執筆にあたり、久保尚文氏から高野細川氏等につき多大のご教示を得たことを記し、謝意を表したい。

参考文献

久保　尚文　1983年　「白岩川流域諸荘園の一考察―高野荘を中心に―」『越中中世史の研究』桂書房
同　1990年　「武家支配の展開」『入善町史』通史編、入善町
同　1994年　「高野庄」『富山県の地名』、平凡社
高岡　徹　1979年　「富山県の中世城館地名」『かんとりい』第３号、越中の歴史と文化を考える会
同　1980年　「仏生寺城」『日本城郭大系』第７巻、新人物往来社
同　1981年　「城館研究の視点（１）」『富山史壇』第76号、越中史壇会

図40　竹内館跡周辺の小字分布図（圃場整備前の地割図より高岡作図）

「舟付場」を北方から望む
中央の木立の手前が旧小字「舟付場」、その手前に古くは白岩川が流れていた。中央の道路は、その旧河道を横切って新しく作られたもの。

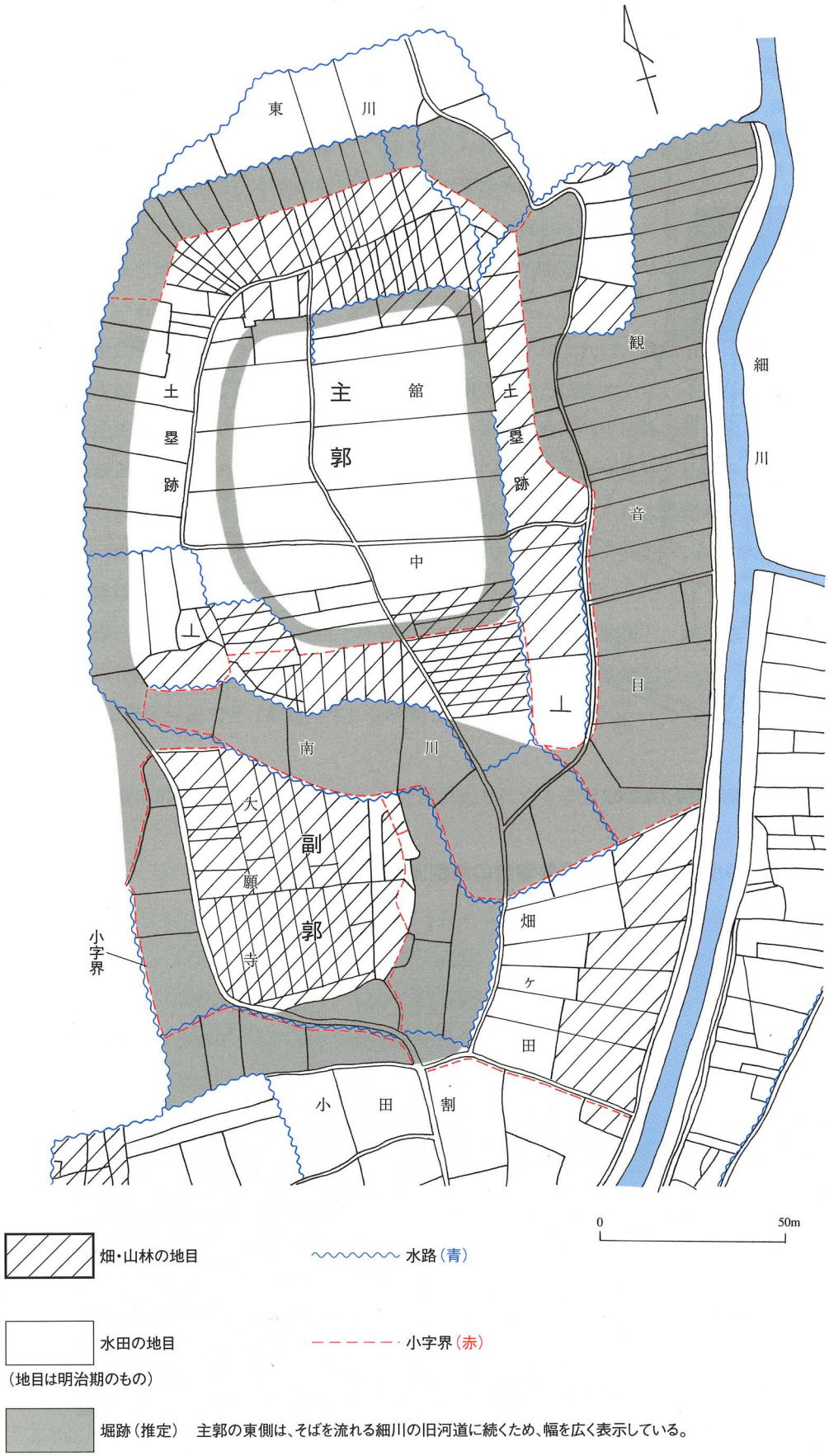

図41　仏生寺城のプラン復原図　（圃場整備前の地割図より高岡作図）